

名碑から生まれた記念館

多胡碑は新郡設置を記念して、和銅4年に建てられた碑です。『給羊』の二字に由来し「ひつじさま」として古くから親しまれ、大事に守られて来ました。この先人の心と特別史跡の意義を更に高めるために、多胡碑記念館を建設いたしました。この記念館は多胡碑歴史研究資料・書道史研究資料・古代文字研究資料等を収集し、皆様の研究や文化活動施設としてご利用いただくため、開館いたしました。更なる充実に努め、皆様のご来館をお待ち申し上げます。



深草のうちに埋もれし石文の
世にめづらるる時はきにけり

楳取素彦の碑



多胡碑記 日下部鳴鶴書

世界の文字体系

世界で一番早く文字を使いだした地域は、地中海沿岸の古代エジプトやメソポタミアです。人びとは文字を使って神に祈りをささげ、穀物の生産を記録したり、神話や物語を書き残しました。これらの文字は消滅してすでに使われていませんが、これから派生して世界各地に文字がつけられました。

た。世界の文字は次の系統が考えられます。

まずシュメール民族（メソポタミア）がつくった楔形文字、つぎに象形文字に代表されるエジプト文字（ヒエログリフ）。今日、世界各地で用いられているアルファベット文字体系。使用人口最大の「漢字」は紀元前1300年から使われた「甲骨文字」が源流です。本表は歴史上主要な文字を系統的に分類し文字相互の関係をつかむための体系表です。



世界の文字体系年表



青銅器「爵」



甲骨文字（複製）

刻 石

野辺の石造りの道祖神や道しるべの文字を見たとき、時としてほのぼのとした感じを受けますが、それは紙に書かれたものとは違った味わいと趣があるからです。刻石というものは文字の上手下手を抜きにし、名もない書き手と石工の汗と長い年月とに生みだされたすばらしい総合芸術品にほかならないのです。

文字は彫り付けられる事によって永遠の命が与えられるのです。帛きぬや木片や紙に書かれた文字は余程の好条件が整わなければ千年、二千年の歳月を経た今日まで伝わる事は不可能です。黄河文明の甲骨に刻まれた殷墟文字いんきょ、メソポタミヤ文明の

粘土板にヘラで型捺くさびがたしされた楔形文字、エジプト文明の石に刻されたヒエログリフ、これら数千年の歴史を経た古代文字はすべて8世紀末から今世紀になって発見されたものです。石に刻され、粘土板は焼かれることで命が吹き込まれたのです。その結果、今日において古代史を解明するうえにおいて大変貴重な資料とされるのです。ここにエジプト・メソポタミヤの古代文字と、身近な漢字を北齊時代（6世紀）の「泰山金剛經たいざんこんごうきょう」から、それに元時代（14世紀）に漢字文化を取り巻く他民族で使用されていた六か国文字を「居庸関壁刻きようちんかんへきこく」から採り、部分模刻しました。これらの文字がどのように刻されたか、どのような道具が使われたか、現代とはどう違うのか、様々なことを想像しながら見てほしいと思います。



泰山金剛經集字磐（等大模刻）



居庸関壁刻六体文字（模刻）

居庸関洞内の壁面には、陀羅尼という経文がランチャ文字、チベット文字、パスパ文字、ウイグル文字、西夏文字、漢字の六体で刻されている。

拓本との対話

拓本とは、金属・石・木・骨などに彫られた文字や紋様に紙を貼りつけ、墨で拓（打つ）してその形を浮き出させたもので、搨本とか石刷りとも称されています。現代の印刷に通じ、書の手本や鑑賞の為には欠かせない画期的な印刷技術で、その技法には乾拓と湿拓の二種があり、更に湿拓には打拓と擦拓とがあります。

拓本の始まりがいつごろからかは定かではありませんが、中国の敦煌石窟で発見された拓本は明らかに唐時代の物ですから、随末・唐初には行われていたでしょう。最も盛んになったのは金石学（金や石に刻された文字や文章を研究する学問）の隆盛を見た清朝時代で、さまざまな刻石や文字資

料が採拓されています。この時代は日本の江戸期に当たり、長崎貿易を通じて中国から船積された拓本は当時の学者や文人に多大な影響を与えました。当時の「多胡碑」も宝暦四年（1754）に高橋道齊が沢田東江と採拓し、学者に配り伊勢神宮にも奉納しています。

当館では「多胡碑」の書に通じるとされる北魏の鄭道昭（？～516）の摩崖書の拓本を中心に展示しました。それらは山東省の雲峰山等の山中の雄大な自然の岩肌に刻し遺された文字群で、代表とされる数種の内「論經書詩」の雄大さと「鄭羲下碑」の精密さは特に味わい深いものがあります。

拓本は硬い金石の面から生み出された物ですが、長い風雪に耐えた石の表情や、文字を書いた筆者、その文字を刻んだ石工、採拓した人の心や訴えとも対話の出来る清新で温かみのある対象だと思います。



好太王碑

この碑は中国吉林省集安県にあり、碑高6.39メートル不整形な方形の石柱で重量は37トンです。高句麗20代長寿王が19代好太王の治績を顕彰したものです。

銘文には当時の日本（倭）に関する記述も見られ、古代朝鮮と日本の関係を知る重要な資料です。この書は楷書体が確立していた5世紀にあって、古隸様式で書かれています。古隸体が用いられた経緯は明らかではありませんが、近接する時代の類型も見出されておらず、書法史上では異例とされています。



三面



一面

露 台

羊太夫の祖先が朝鮮半島から渡来したといわれているので、韓国の上流階級の夏の住まいをイメージして設計しました。

多胡石を素材とした建造物の壁、露台から眺めた外庭は陰陽の庭石、一木一石の中庭、太鼓ばりの障子、板ばりの床等上流階級の生活を端整に表現しました。



露台。右側に中庭。左側に多胡碑の柱と集落が見える。



露台。左側に多胡碑が見える。



露台より2階中庭を見る。

羊伝説筆録本

多胡碑は地元では「ひつじさま」として古くから信仰されてきました。羊太夫の伝説もそうした中から生まれたものです。今日伝えられている筆録の大部分は江戸時代以降のもので、吉井町や甘楽町を中心に各地に残されています。八束羊太夫実録・羊太夫栄古記・羊太夫一代記・小幡羊太夫宗勝縁起・八束山千手観音略縁起等、これらは全て作者名の記録はなく、年号は寛永・寛保・嘉永

などの三点のみ記録されています。

あらすじとしては『上野国多胡郡八束山城主は八束羊太夫宗勝で藤原将監勝定の嫡男であるが、勝定には子供がなく、大沢の不動尊に参詣礼拝した結果、まもなく男の子が授けられました。羊の日の羊の刻に生まれたので、羊の太夫と名づけられました。身の丈2m50cmほどの大男になり、多胡郡を治め、八束の小脛を家来に従え、奈良の都に日参しました』と言うように、他の書も羊太夫栄古記の内容とほぼ同じです。しかし各書によって若干違いがあります。



羊太夫伝説・切り絵



羊太夫伝説筆録本

日本の名碑



多賀城碑（複製）



那須国造碑（複製）



山ノ上碑（複製）



金井沢碑（複製）

多胡碑文と読み下し文

多胡碑は和銅4(711)年3月に多胡郡が設置され、その記念に建てられた石碑です。碑文は6行80字が和漢混淆文で記されていて、内容は太政官(朝廷)から出された命令書をもとに、新郡の成立された経緯が示されています。

碑石は吉井町の南部の第三紀層から産出される砂岩ですが、土地では天引石、あるいは多胡石と呼んでいます。角柱の碑身は高さ1m27cm、幅60cm、笠石の幅90cm、厚さ15cmでつくられ、終戦の昭和20年に埋蔵し再建にあたり、台をコンクリートにかためましたが、複製にあたり旧に復して台石にしました。

本碑は多胡郡が外来人とのかわりにおいて新設されたことや、律令国家における中央支配が地方に及んだことをうかがわせる貴重な資料でもあります。碑文の内容や解釈については、江戸時代から多くの学者や研究者が、さまざまな説を述べ、特に「給羊」の二字をめぐって諸説があります。

主な説として、多胡郡が上野国府から末(西南)の方向に成立したという説と、羊という人名説です。しかし吉井町黒熊塔の峯出土「羊子三」瓦の発見と、尾崎博士説の「郡成立の布告はあっても、郡司羊の任官叙位が未発令の状態を「給」によって表現した」という人名説が有力なものとして評価されています。なお、地元の人びとは多胡碑を「ひつじさま」と呼んで祀り、当地には羊太夫伝説があって、ギリシャ神話のペガサス物語を思わせるものがあります。



特別史蹟 多胡碑

読み下し文(尾崎喜左雄博士の読みによる)

弁官の符に上野國の片正郡、緑野郡、

甘良郡并に三郡の内三百戸を郡と成し羊に給して

多胡郡と成すとあり。和銅四年三月九日甲寅の宣なり、

左中弁は正五位下多治比真人

太政官二品徳禎親王、

左大臣は正二位石上尊

右大臣は正二位藤原尊なり

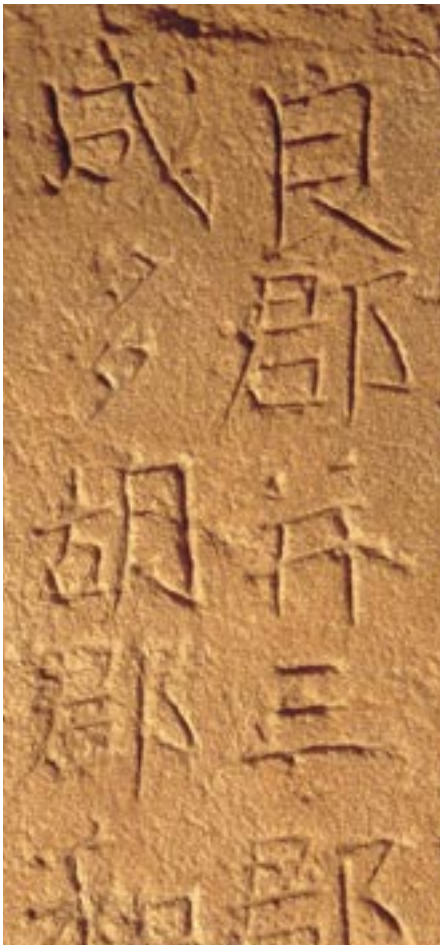
多胡碑の書と刻

多胡碑が書物によってはじめて著^{あらわ}されたのは、室町時代の連歌師柴屋軒宗長の紀行文「東路の津登」です。江戸時代に入って儒学者、伊藤東涯が「蓋簪録」と「輶軒小録」に載せました。その後、多くの学者や書家が多胡碑の悠々とした配字や堂々とした古風な筆法に注目をしてきました。

宝暦4（1754）年、下仁田の学者高橋道齊は江戸の書家沢田東江を多胡碑に案内し、拓本を採り同好の人びとにこれを贈り多胡碑を広く紹介しました。

東江の模刻版が清（中国）の葉志誥の「平安館金石文」に収録され、後に我が国の書道界にも大

きな足蹟を残した楊守敬は、多胡碑は六朝の風趣があると激賞し「楷法溯源」に39字を採録しました。また翁方綱も名碑「瘞鶴銘」にも劣らぬ傑作だと述べています。日本の古碑は一般に六朝風といわれていますが、多胡碑は朝鮮半島の石碑の雄、広開土王碑（高句麗414年）の字風に似て頭部を大きく作り懐を広く構えています。一方、中国北魏の鄭道昭の鄭義下碑にも共通性があるといわれます。また中国から半島を経て渡来した仏教や古代文化にも通じるものがあり、筆者は渡来者の手によるという推測も生まれてきます。各字の大きさとらわれず布置一杯に点画の奇斜縦横をおおらかにして、ひとつの調和を生み出しています。なお彫りは字風になぞらえ、刻線の鋭さをタガネの手彫りで生かした通しの薬研彫りで、まさに彫書一致といえましょう。

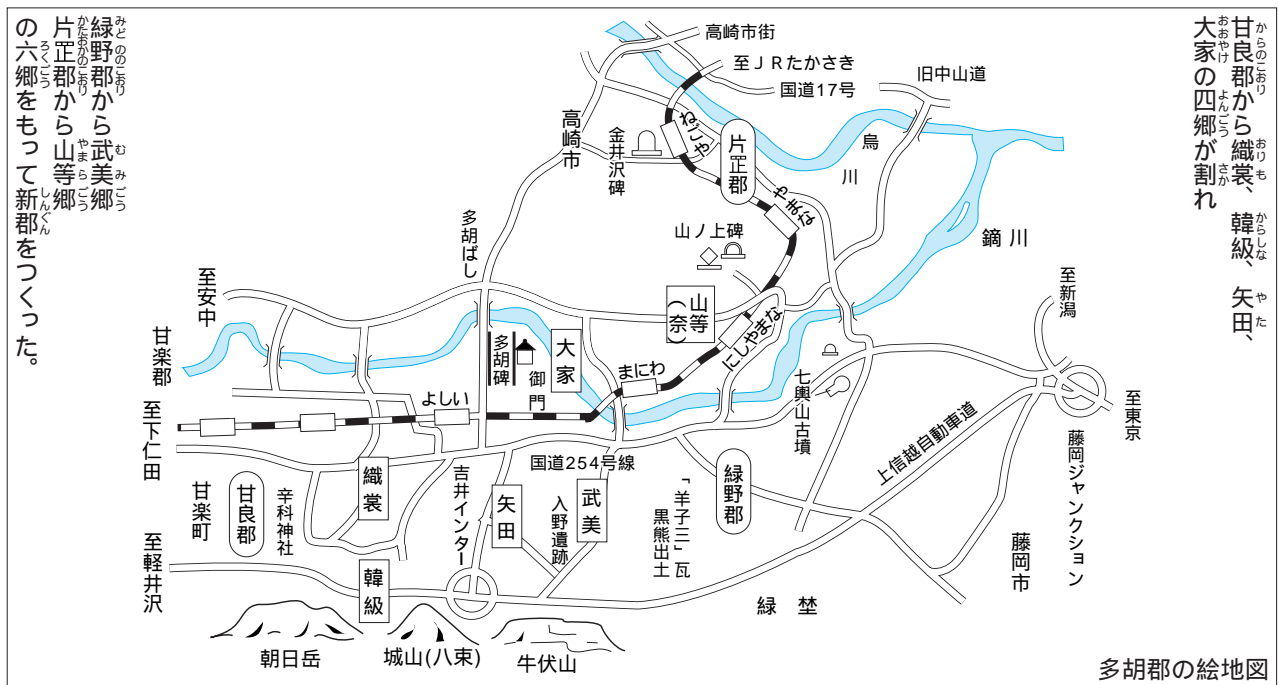


薬研刻り

多胡郡の設置

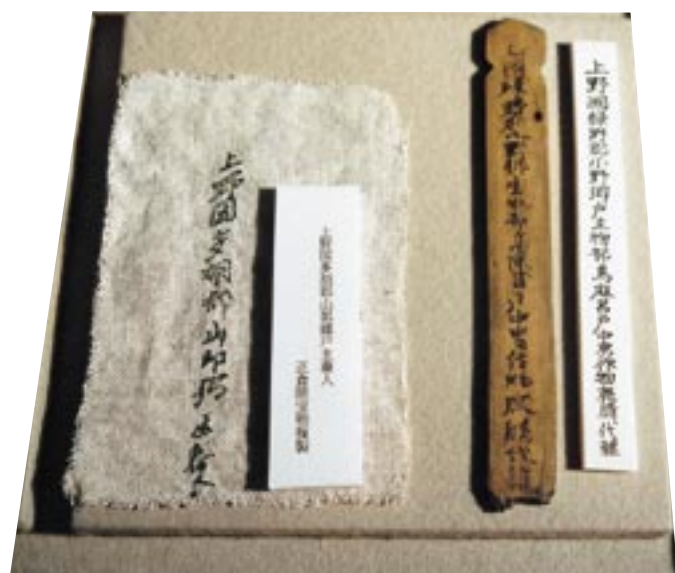
多胡郡設置は大宝律令（701）で国・郡・里制度によりなされたものです。続日本紀（797）に片正郡から山部（等・奈）郷、緑野郡から武美郷、

甘良郡から織裳・韓級・矢田・大家郷の6郷をもって上野国で14番目の新郡を建置したとあります。当時の一郷は50戸が原則で多胡郡は300戸で和銅4年（711）に成立したと碑文にあります。郷と郷の境界については日本地理志料等にふれられていますが、馬庭地区などはどの郷に属していたか不明です。



みどののり
緑野郡から武美郷
かたあかのり
片正郡から山等郷
の六郷をもって新郡をつくった。

からのり
甘良郡から織裳、
おあやけ
大家の四郷が割れ
韓級、
やた
矢田、



正倉院宝物（複製）



続日本紀

多胡郡の窯業

古墳時代の中期（1500年前）、朝鮮半島から窯かまを使って焼いた硬い焼き物である須恵器すえきの生産技術が伝わりました。これは奈良時代になるとさらに普及しました。

この生産には良い粘土と多量の薪まきが必要なため、生産地が限られ、多胡郡の南と北の丘陵地帯

は上野国の主要な生産地となりました。当時の窯は、斜面に床を傾斜させてトンネル状に作られた「登り窯のぼりかま」でした。

上野国分寺跡からも多胡郡産の文字瓦が多く出土し、寺院の瓦を量産したことがわかります。平安時代にはいと上野国の瓦はほぼ多胡郡だけで焼かれるようになりました。

また硯すずりも須恵器すえきとして焼かれたものが出土しています。



須恵器



風字硯



文字瓦

人々の暮らし

奈良時代になって国の統治制度が整うと、国は人民を土地・租税の制度を通じて直接支配するようになり、従来の豪族は地方制度である郡の役人「郡司」になりました。

これらを含む有力者の名前は、瓦の寄進者名などに見ることができます。

また万葉集には、男女が一堂に会して飲食をし、歌い舞い、そして妻選びする集いである「歌垣」を思わせる歌があり、庶民の生活の一端が窺われます。さらに発掘された遺物・遺構には、現実の活動の痕跡が今も残っています。



多胡の嶺



万葉東歌(3411)尾上柴舟書

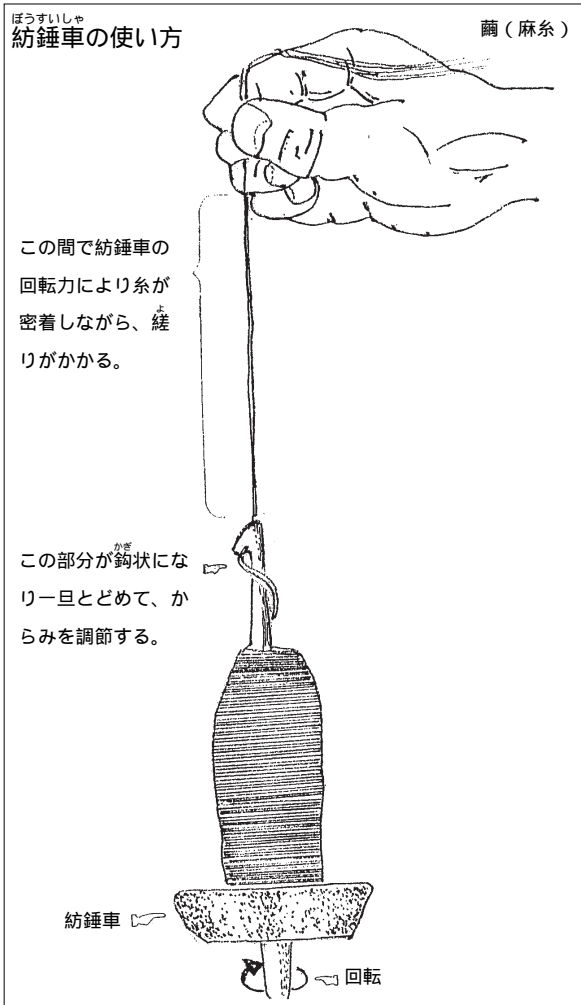


万葉東歌(3403)金井之恭書
篆額 九条道孝

紡 錘 車

多胡郡（吉井地方）は紡錘車の出土数が極めて多い。

古代における織布などの量産があったと思われる。織裳郷などの地名はその一端を示す。



紡錘車で羊毛を紡ぐチベットの婦人



刻字紡錘車・下家轉



吉井町出土紡錘車

李朝の書齋

多胡碑は朝鮮半島の文化や技術が深くかかわっているといわれています。時代は下りますが朝鮮の李朝時代（1392～1910）の文化の一面を表す書齋を再現してみました。

書齋は兩班^{やんぱん}と呼ばれる貴族や文化人が、書、読書、絵画、ときには来客の応接に使った部屋です。李朝時代は新羅^{しらぎ}、高麗時代の仏教的な石造美術や書芸に変わり、儒教^{じゆきやう}を国教としたので儒教的な文字絵をはじめ、李朝の社会は絵画に満ちていました。

男性の部屋は、山水風景画、女性の部屋は花鳥画、子供の部屋は文字絵が掛けられていました。その他磁器（白磁^{ぶんぼうしほう}）や文房四宝（文具）や調度品など書齋には李朝文化が体感できます。なお冬には竈^{かまど}の火熱を床に通す「オンドル」が敷かれ暖がとれるようになっています。

遊びの部屋

砂文字や、パソコン習字で遊んだり縮小した多胡碑文、万葉東歌など採拓^{しつたく かんたく}（湿拓、乾拓）して楽しめます。



李朝の書齋



遊びの部屋